

中西 淳朗 著

『仙花堂医史往来』

著者は横浜市で皮膚科医院を開業、日本医史学会評議員、日本医史学雑誌編集委員、医療関連団体の要職などをこなしつつ、医史学に対するあくなき情熱と持前の博覧強記を駆使した十五年間の研究の成果をこの一冊にまとめられた(ちなみに「仙花堂」とは著者の書齋のことである)。

著者は平成六年横浜における第九十五回日本医史学会総会において、『横浜軍陣病院』の再検討」と題した特別講演を行った。この講演によると、横浜軍陣病院は幕末戊辰戦争に際して西軍(いわゆる官軍)戦傷者の収容、治療のため、英医W・ウィリスの力を借りて慶応四年四月横浜修文館に急遽設置された野戦病院であり、同年十月江戸医学所内に東京大病院が設置されて患者が転送されるまでの約六ヶ月間、W・ウィリスらの指導のもとに多数の日本人医師が、後送されて来た戦傷者に対し当時としては困難な治療を行った。この講演の中で著者は現在のこのさかれている資料の間で病院の場所、内容など一致しない部分があることを指摘し、慶応四年一月横浜フランス語伝習所に設置された仮病院との関係を「全く別のもの」として明らかにした。これが著者の横浜医史研究の原点となっている。

さて、本書を繙くと、まず『横浜病院日記』の研究余滴』では、病院における介抱女(看護婦兼介護人)の雇入れとそ

の報酬が当時の人件費の中ではかなりの高額であったこと、また介抱女と入院患者の間の「不埒な行為」が目立ち当局がその対応に苦慮したことが興味を引く。当局の処置は介抱女を四十歳以上とし、不埒な行為があった患者は退院させることであった。

「横浜における梅毒の史的 연구」では、本邦における検梅制度の始まりは万延元年長崎であり、横浜は慶応四年W・ウィリス、J・ニュートンにより始められたものであるが、ニュートンの熱心さのあまり、日本側と軋轢が絶えなかつたこと、梅毒に罹患した娼妓はロックホスピタル(鍵のかかる病院)に収容したことが記されている。

「皮膚科医学史」では、外用剤の洋式古処方の変遷が詳述されている。この項で外科とは「医の道(本道||内科)」の外にある「医術」という意味で呼ばれた、とあるのに「外科医である私は、今更ながら妙に納得させられた様な気がした。

「幕末医史外伝」では、鳥羽伏見に始まり函館で終わった戊辰戦争における医師達の活躍が記されている。何といつてもW・ウィリスの存在が大きいが、江戸、会津、庄内、仙台と東軍(いわゆる賊軍)とともに転戦して軍陣医療に専念した松本良順の心意気、松本と同門でありながら奥州出張病院で西軍(いわゆる官軍) についての関寛斎、函館五稜郭では博愛の精神で敵味方の別なく医療活動を行った高松稜雲など、幕末軍陣医療史の上で大変興味のある人物については、著者の今後の研究を期待したいところである。

ちなみに、私は戊辰戦争は思想、階級意識経済などが異なる集団が冷静な話し合いが出来ないままに武力衝突に至ったもので、両者のまとめ役として政治的外交的手腕のある人物（例えていえば坂本龍馬など）を欠いたことによる国家的悲劇であり、いようなればアメリカ南北戦争の様なものであった、と思っている。

「閑話休題」

本書を通して読めば、内容の重複が目立つが、その都度の資料の探索が丹念で出所が明らかにされていること、著作作製による表が多用されていることが、読者にとって年代の理解に役立っていることは評価に値すると思う。

著者の中西淳朗氏と私は同年輩であり、十数年前に全国保険医団体連合会において共に機関紙部、文化部を担当したところのあるいわば戦友である。氏は当時から企画力、実行力が抜群であり、「近代医学のあけぼのを探る医学史めぐりの旅」と題して日本全国の医史蹟を歴訪する企画を立て、十数回にわたって実行に移された。私もそのほどんどに同行し医史学に対する興味を改めて啓発されたことは記憶に新しい。

博覧強記の権化である氏の今後のご活躍を願っている。

(北小路 博史)

〔神奈川県保険医協会、横浜市神奈川区金港町五一三六、東興ビル2F、電話〇四五―四五三―二四一一、平成十三年八月、A四判 三三八頁、三〇〇〇円〕

澤田 祐介 著

『蘇る医神アスクレピオスの物語』

多発する医療事故、患者の権利意識の昂揚などを背景に、医の倫理の向上が強く叫ばれている昨今、その原点ともいえる医神アスクレピオスやヒポクラテスが改めて見直されつつある。このような時期に、本書が上梓されたことは誠に意義深いものがある。

私自身も、アスクレピオスには大変興味を抱き、アテネ、コス島、エピダウロス、ペルガモンなどのアスクレピオス神殿跡へは二、三回ずつは訪れているが、その都度感慨を新たにさせられている。日本病院会でも、数年前より「医学の歴史を訪ねて」という旅を催し、アスクレピオス神殿を中心に各地の医跡巡りを行っているが、とくにコス島のアスクレピオス神殿における古代ギリシアの医師になるための「ヒポクラテスの誓い」の儀式には、参列した一同が医の原点を強く想起させられ、感激ひとしおであった。今年も五月の連休を利用して、トルコのペルガモンのアスクレピオス神殿跡を訪れる旅を催行の予定になっている。

本書は、一読して大変やさしい表現で、しかも楽しく読めるよう、アスクレピオスの子孫で日本の離島で開業している医師が先祖を回顧するという独特な物語構成がとられている。医史的な検証というよりは、むしろカタカナ名がたくさん出てきて読みづらいといわれるギリシア神話が、アスク